

中欧 3 都市を駆け巡って

碁楽連理事・中野寿因碁同好会会長代理 磯部 信広

7月11日から18日までハンガリーのブタペスト、オーストリアのウィーン、チェコのプラハの3都市をバスで(約800km)めぐってきた。この3カ国は、ヨーロッパの中央部に位置しそれぞれの面積は北海道の8万km²程度で人口も1000万人前後である。これらの国は、その歴史を見るとフランス、ドイツ、ロシアなどの大国の狭間で小国ながらその首都として「ドナウの女王」、「音楽の都」、「百塔のそそり立つ黄金の都」などといわれ存在感を示している。

特に、プラハは戦略的に重要な位置を占めるところから、古来この地を制するものはヨーロッパを制するといわれ、またヨーロッパの東西と南北を結ぶ交通の要地として栄えたが、時には周囲の強国に占領されることにもなった。3カ国は、ハプスブルグ帝国に属していたが、帝国の消滅とともに分割の憂き目に会った。また、オーストリアは第一次、第二次世界大戦の敗戦を経て、ハンガリーは1956年の動乱、チェコは1968年のプラハの春という悲劇を経とともに共和国として現在に到っている。



ところで、成田とヨーロッパは直行便で結ばれているが、シベリア経由でもドイツのフランクフルトまで13時間かかる(時差7時間)。更にブタペストまで2時間、ホテルに着くまでは延べ16時間ほどかかる。まだまだ地球は広いと実感する。

プラハ

現地に着くとまず必要なのは、通貨である。今回は、ユーロ圏ということで予めユーロに換金していったが、そのレートは168円(当時)以上で非常に割高だった。いつものことだが、枕もとのチップやトイレのチップなどわずらわしい。ホテルは言うまでもなく洋式スタイルで洗面所、トイレなど一様に高くバスタオルなどは大きすぎて使いにくい。水は、どの国も硬水で市販のもの(バスに携帯1本1ユーロ)を飲む。気候は、緯度

的に北海道と同じくらいと聞いていたが、今回はどの国も晴天に恵まれ特にプラハは36°Cとこれまでにない暑さだった。

学校の夏休みは7月から2ヶ月といわれ一家でバカンスを楽しむという。行き先はイタリア沿岸や黒海沿岸などとのこと。このため普段は質素な暮らしをしながらこの日に備えているという。今、街に出ているのは主に観光客で地元の人たちは少なく車もまばらだという。ブタペストでは、私たちが泊まったドナウ川の中州のマルギット島には走行者用アンツーカーがあり、カラフルなランニング姿で早朝から夕方にかけて地元の人たちが個人やグループで思い思いのスピードで走っていた。食事は、外出先でとるのだがそのスタイルは毎回パンを添えて前菜・スープ・メインディッシュ(肉にポテト風の和え物)・デザートがつく。飲み物は各自負担で主にビール、ワイン(ともに平均4ユーロ)を飲む。食事についてはその量が多いことで女性にとっては負担だったようで食べ残しが目立った。ちなみにホテルでの朝食は、毎回バイキングだった。

今回の旅行で感じたことは、1、石の建造物が多く、教会を中心にした広場があってそれを取り囲むように美術館、博物館、オペラハウスなどの文化施設が充実している。2、経済的にはユーロ圏が巨大化しつつある。3、弱小国は、戦争が起きたときには悲惨な目にあうこと。4、日本人と欧州人の体格の違いを感じさせられる。5、海外に出て交流するには語学が欠かせないことなどである。

(暮楽連だより第193号 2007年8月25日)